

近代文学閑談

西田 勝

●三一書房●

近代文学閑談

西田 勝

●三一書房●

西田 勝 (にしだ まさる)

1928年，静岡県に生まれる。1953年，東京大学文学部卒。現在，法政大学文学部教授。日本社会文学会代表，非核ネットワーク世話人。

著 書 『近代文学の発掘』（法政大学出版会），『近代文学の潜勢力』（八木書店），『社会としての自分』（オリジン出版センター）ほか。

編 書 『田岡嶺雲全集』（全8巻，刊行中，法政大学出版局），『戦争と文学者』（三一書房），『非核自治体運動の理論と実際』（オリジン出版センター）ほか。

近代文学閑談

1992年12月15日 第1版第1刷発行

Printed in Japan

著 者 西 田 勝

©1992年

発行者 島 山 滋

印刷所 株式会社厚徳社

製本所 山本製本所

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都文京区本郷2-11-3

電話 03 (3812) 3131~5番

振替 東京 9-84160番

郵便番号 113

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

ISBN4-380-92258-8

近代文学閑談／目次

I 作家と作品

坪内逍遙 『小説三派』11

二葉亭四迷 『小説総論』15

森 鷗外 『舞姫』18

樋口一葉 『たけくらべ』21

泉 鏡花 前近代作家か 25 『化銀杏』28

国木田独歩 天皇制³² 『牛肉と馬鈴薯』34

徳富蘇峰と蘆花 徳富兄弟と松岡荒村³⁸

山路愛山 再吟味 47

内村鑑三 水産学⁶⁰

内田魯庵 『暮の二十八日』65

田岡嶺雲 文学的予言力⁶⁹ 反語⁷⁵ 幸徳秋水との交わり⁷⁹ 公害論⁸¹ 女性解放論⁸⁵ その波紋

88 自由民権の息子⁹⁴

宮崎滔天 『狂人譚』と『支那革命軍談』97

堺 利彦 『夫婦の組合』¹¹¹ 『新社会』¹¹²

小川芋銭 ポスト・モダン¹¹⁶ 『草汁漫画』¹¹⁷

夏目漱石	『私の個人主義』と『明暗』	121	戦略	124
島崎藤村	『破戒』から『夜明け前』へ	131		
島村抱月	イプセンと女性解放	133		
真山青果	『南小泉村』	141		
上司小剣	『簡易生活』	147	『英霊』の読み方	148
石川啄木	『時代閉塞の現状』	157	飛行機	174
大杉 栄	『近代思想』の射程	178	『文明批評』	179
荒畑寒村	『光を掲ぐる者』	190	伊藤野枝と	181
山本飼山	彷徨	194		
徳永保之助	肖像	201		
宮嶋資夫	『坑夫』	219	嶺雲の因子	228
宮地嘉六	後悔ひとつ	233		
平沢計七	『非逃避者』	236	『二老人』	243
	未来性	263	完成と未完成	245
小川未明	社会小説家	264	『俺と俺の周囲』	248
賀川豊彦	『空中征服』	267	藤井真澄の筋力	253
加藤一夫	『科学と文芸』	271	小説家として	272

黒島伝治 『バルチザン・ウォルコフ』²⁷⁸

中野重治 『日本文学の諸問題』²⁸⁴ 『小林多喜二と宮本百合子』²⁸⁷ 『わが国 わが国びと』²⁸⁹ 追悼

²⁹¹

窪川鶴次郎 一九三〇年代²⁹⁵

佐多稲子 『樹影』まで²⁹⁸

埴谷雄高 『死霊』³⁰¹

荒 正人 未来への遺言³¹¹

佐々木基一 『時の音』³¹⁴

金 達寿 コリアン・ユーモア³¹⁶ 『後裔の街』以降³¹⁹

杉浦明平 『泥芝居』³²¹

片岡良一 近代文学史学の必要³²³ 『近代日本文学の展望』³³⁸

谷沢永一 『読書人の立場』³⁴⁵ 偶像暴露³⁴⁷

渡辺 清 『私の天皇観』³⁵⁰

長岡弘芳 『原爆文学史』³⁵²

II トピックス

「民権」と「国権」³⁵⁷

軍歌としての君が代 360

「プラトニック・ラブ」 363

近代的恋愛とは何か 365

訳 害 371

『戦争に対する戦争』 385

文化人・芸能人の戦争協力 387

初出一覧 393

あとがき 398

近代文学閑談

I
作家と作品

坪内逍遙

§ 『小説三派』

評論家としての坪内逍遙の仕事といえば『小説神髓』——文学史を開いても辞典を覗いても第一番に挙げられているのは、この作品だが、それは彼の評論家としての仕事のなかで最上のものといえるだろうか。『小説神髓』は、日本において近代写実小説への道を拓いた画期的な著作だ。それだけに今読んでも手応えが、ずっしりとある。大変な才能だといわなくてはなるまい。しかし、その内容の深さ、豊かさということになると、それから四年ほどして書いた『小説三派』（説売新聞・一八九〇年一二月）の方がすぐれているというのが、私の十数年来の持論だ。

どうしてそう考えるのかというと、そこでは何よりも逍遙独特の用語法によって近代小説の構造が近代以前の物語との対比において、『小説神髓』とは比較にならぬたしかさで把握られているからだ。もともと『小説三派』は同時代の小説を批評するにあたって、その批評の原理を示すことを主眼としたエッセイだが、逍遙はそこで近代以前の物語を「固有派」と名付け、それは「事」を「主」とし「人」を「客」とし、「事」を「先^{さき}」とし「人」を「後^{あと}」にする構造を持っているとした。「人」と「事」というのは、今風にいえば個と状況ということだ。つまり、近代以前の物語においては本当の主人公は「事」であり、「人」はその脇役でしかない。したがって、そこで展開されて

いる思想は「三世因果の説」でなければ「天命の説」だ。

そしてその対極にあるのが「人間派」で、「人」を「主」とし「事」を「客」とし、「人」を「先」とし「事」を「後」にする構造を持つているとする。つまり、ここでは、いつさいの原因が「人」の上にある。したがって、まず「人」があつて「事」が生じ、その結果に対してまた「人」が働きかけて、もう一つの「事」が起り、そうして「大詰の大破裂」か「大円満」を迎えるのがこの近代小説の究極ともいふべき「人間派」の行き方なのだ。

ところで両者の中間に位置するのが「折衷派」あるいは「人情派」で、それは「人」を「主」とし「事」を「客」とし、「事」を「先」とし「人」を「後」にする構造を持つていとされる。つまり、ここでは「人間派」と同様、「人の性情」を描き出すことが主眼だが、「事」は「人」によつて結果したのではなく、すでにあたえられたものとして存在している。それなら、この派においてもどうして「事」が必要なのかといえば、やはり「人間派」の場合と同様、「人の性情」はそれ自身としては「形」がないから、「形」のある「事」を通してでなければ描き出すことができないからだ。

逍遙は以上のように同時代に存在する、あるいは将来に期待される物語や小説を三つのタイプに分け、さらに「固有派」は広い意味での「叙事詩」の形で、「人間派」は、もつとも狭い意味での「ドラマ」の仕組みだとしている。しかし、これまでの紹介からも知られるように「固有派」は近代以前の伝統文学、「折衷派」は短篇小説（ノベル。逍遙の時代にはまだ生まれていなかったが、私小説もここへ含めてよい）、「人間派」のそれは長篇小説（ロマン）の規定にあたる。しかも逍遙による規定づけは、これまで見てきたように実に見事だ。彼は、はっきりとここでは「人情」と「人間」

とを分けている。彼にとつて「人間派」は進んで状況に働きかけ、それを變える市民的精神の産物なのだ。人間讃歌の証言なのだ。

このように「小説三派」は近代以前の物語との対比において近代小説の内的構造を、たしかな分析力で明らかにしているだけではなく、すぐれた長篇小説論にもなっている。そして当然ながら、それは内部生命論にもなっている。

「……されば傑作のドラマを読めば吾人恍として因果の理を見、且雜然紛然たる人寰じんかんに一定の理法流行することを醒悟す。而して其理法たるや幽明にまたがり有為無為に涉り、虚靈より出でて実相に現はれ実相寂滅してまた虚靈に帰す。例へば〔シェークスピアの〕『シーザル』のドラマに就きてブルータスを見よ。(中略) 彼れ現界かに於て敗れたれど、隠然靈界こゝろに於て凱歌を歌へるを聴けばなり。吾人が到底ブルータスの義を美とせざるを得ざることを想へ。即ち此明界こゝろの背後に、更に又一の幽界ありて人間の妍醜げんしゆうを定むるを見るべし。是前これに虚より出でて実に現はれ、実滅してまた虚に帰すといへる所以なり」

これは「人間派」について書かれた部分の一節だが、北村透谷が「人生に相渉るとは何の謂ぞ」を書いて山路愛山に対する批判に立ち向かつて行つた時から遡ること三年余のことだ。

さらにいえば、それは、すぐれた古典論でもあつた。逍遙は、さきのように物語や小説に「三派」を立てながら、一方では芸術としての価値の優劣をつけなかつた。それは何よりも、「折衷派」さえ寥々たる日本における近代文学のまだまだ軟弱だつた基盤を確固にするための漸進主義的な戦略であつたが、それだけに鷗外の批判を呼び、「没理想論争」の開始となるのだが、同時にそれは古典文学論でもあつた。Xという作品が「固有派」であれ、「折衷派」であれ、「人間派」であれ、

それなりに内部生命をたしかに表現することができていれば、それは、すぐれた作品だからだ。すぐれた物語はすぐれているし、ダメな小説はダメだからである。もちろん、そこには「時」という問題もあるが。

逍遙が『小説神髓』の水準を質的に越える、すぐれた『小説三派』を書きえたのは、一つにはそこに二葉亭との劇的な出会いがあったからだ。